

新漁業管理制度推進情報提供事業 平成12年度浅海定線調査（陸奥湾） （要 約）

今井美代子・長崎 勝康・伊藤 秀明・七尾 久美子
調査船なつどまり（浜田 勝雄・長津 司・吹越 弘光・逢坂 健幸・本堂 洋一）

調 査 方 法

- 1 調査船 なつどまり（青森県水産増殖センター調査船、24.0t、770ps、16.5ノット）
- 2 調査点 湾内St.1～6の6点、湾口部St.A,Bの2点、計8定点。（図1）
- 3 調査方法は、平成12年度「資源評価調査事業」沖合海域海洋観測及び資源管理体制強化実施推進事業に関わる海洋観測調査指針（東北ブロック関係・平成12年6月、独立行政法人東北区水産研究所）に準拠した。

調査項目は、以下のとおり。

①気象、海象

天気、雲量、気温、気圧、風向、風速、波浪

②水色、透明度

③水温、塩分

0m、5m、10m以深は底層（底上2m）まで10m間隔

④溶存酸素

St.1～6の20m層、底層及びSt.2と4の5m層

4 調査回数

毎月1回（1月から12月の計12回。但し、平成12年は2月欠測のため11回）

調 査 結 果

本調査結果からみた、平成12年における陸奥湾の海況の1～12月の特徴と各月毎の概況を以下に示す。

なお、平年値は1972～1999年の観測値の平均値である。

平成12年の海況の特徴

- 1 透明度の最低値は、St.1の6月、St.4の10、11月、St.5の11月の10.0mで、最高値はSt.1の11月とSt.A、Bの12月の21.0mであった。

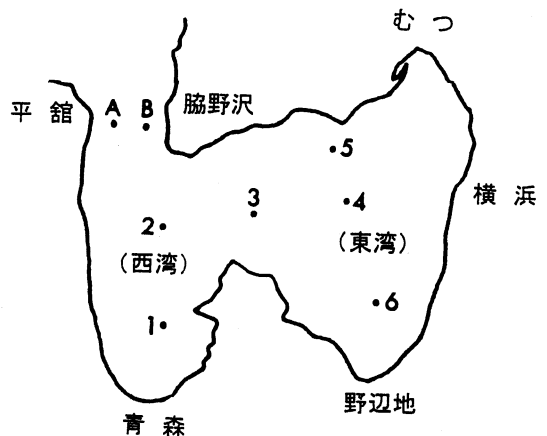


図1 調査点

2 水温の最低値は、各調査点とも3月～4月にみられ、その極小値は各層ともすべて3月のSt.5で記録され、0m層で3.80℃、20m層で3.59℃、底層で3.60℃であった。最高値は8月～10月にみられ、その極大値は0m層で8月のSt.1と3の25.70℃、20m層では9月のSt.Bの24.20℃、底層ではSt.1の9月で22.46℃であった。なお、底層の最高値は、St.1と2では9月に、その他の調査点では10月に記録された。

平年に比べると、1月は平年並みから高め、3月は平年並み、4月、5月はやや低め、6月、7月は平年並みからやや高め、8月から11月にかけては高めからかなり高く、12月にはかなり低めであった。

3 塩分の最低値は0m層では5月のSt.3の31.25、20m層では5月のSt.4の32.68、底層では5月のSt.6の32.99であった。最高値は0m層では12月のSt.Aの33.87、20m層では7月のSt.Bの33.95、底層では8月のSt.Bの34.34であった。

平年に比べると、1月、3月は概ね平年並み、4月は底層のみ平年より低めで他の層は平年並み、5、6月は低め、7月はほぼ平年並み、8、9月は平年並みからやや低め、10月以降はほぼ平年並みであった。

4 溶存酸素は、1月以降3月まで上昇、4月以降はSt.1～3では10月まで、St.4～6では9月まで低下傾向を示し、その後上昇傾向を示した。

底層の最低値はSt.2では10月の3.94mg/L（飽和度51.4%）、St.3でも10月に3.80mg/L（飽和度49.7%）、St.4で9月に4.03mg/L（飽和度51.5%）などの貧酸素状態（水産用水基準記載の「底生生物の生息のために最低限維持しなければならない底層の溶存酸素量4.3mg/L」を満たしていない状態）がみられたが、いずれも翌月には解消されている。

全体の最高値は3月のSt.2の11.46mg/L（飽和度113.0%）であった。